

# 2015 年度 近世史グループの活動

鎌谷 かおる

(総合地球環境学研究所)

## 1. 活動の概要

近世史グループは、ほかのグループより人数が多いこともあり、FS・PR・FR1 と研究会を多く重ねながら、メンバー各自の研究を共有することにつとめ、議論をしてきた。FR1 でメンバーを増員し、全国的な視野による分析と各地域の個別事例による分析という多様な視野による研究がそろったことで、FR2 にあたる 2015 年度は近世史グループ全体およびメンバー各自の課題が明確化され、これまでの年度より研究がはかどった一年になった。

近世史グループのメンバーおよび研究内容は、下記のとおりである。

佐藤大介 (東北大学・グループリーダー) 「南奥羽の気候変動と地域社会」

渡辺浩一 (国文学研究資料館) 「江戸の水害史研究」

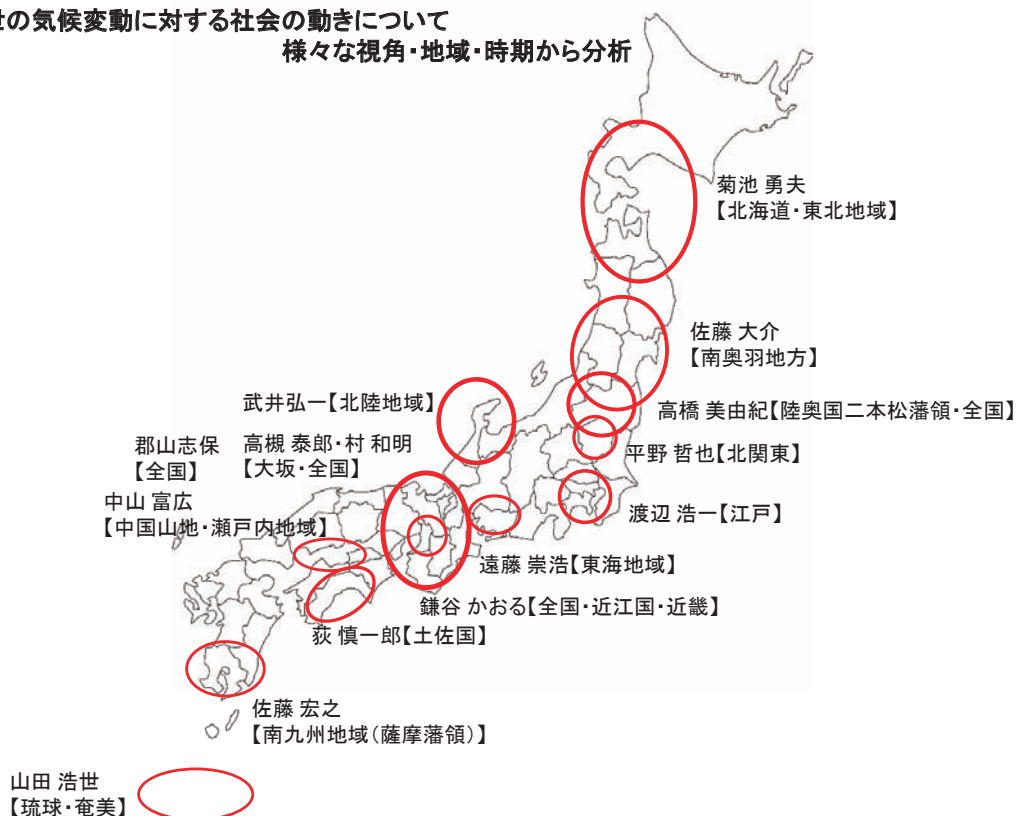
中山富広 (広島大学) 「中国山地・瀬戸内海地域における異常気象・災害と社会的対応」

菊池勇夫 (宮城学院女子大学) 「近世北海道・東北地域の気象災害と藩・地域社会」

平野哲也 (常磐大学) 「江戸時代の北関東の生業・暮らしと気候変動との関係について」

佐藤宏之 (鹿児島大学) 「南九州地方の気候変動と地

### 近世の気候変動に対する社会の動きについて 様々な視角・地域・時期から分析



域社会」

荻 慎一郎（高知大学）「近世における四国太平洋側地域の気候変動と地域社会」

武井弘一（琉球大学）「江戸時代の北陸の気候変動と地域社会」

高橋美由紀（立正大学）「近世における環境変化と人口変数の変動」

高槻泰郎（神戸大学）「近世の米市場・経済動向と気候変動」

村 和明（三井文庫）「近世の経済動向と気候変動」

遠藤崇浩（大阪府立大学）「株井戸制度にみる水環境と地域社会」

郡山志保（加西市教育委員会）「近世における義倉・社倉の設置と気候変動」

鎌谷かおる（総合地球環境学研究所）「近世日本の農業生産力と気候変動の関係について」

山田浩世（沖縄国際大学）「近世琉球・奄美における気候変動問題と地域社会」

の現状について

武井弘一：近世北陸の気候変動と地域社会—現状と課題—

平野哲也：下野国における天保凶作・飢饉体験と社会の対応

佐藤宏之：近世南九州の気候変動と地域社会

佐藤大介：仙台藩での災害対応と藩・社会

## 第2回 近世史グループ研究会

2015年10月31日（土）・11月1日（日）立正大学

中塚 武：プロジェクトの研究状況について

渡辺浩一：江戸の水害における民間施行の推移—1742、1786、1846年—

荻慎一郎：土佐藩領での享保年間の蝗害とその対応、その後の唐芋生産をめぐって

鎌谷かおる：18世紀の気候変動と村の環境—畿内近国を事例に—

## 2. 具体的な活動

### (1) 研究会の実施

2015年度は、合計3回の研究会を開催した。内容は、個別の研究の進捗報告が中心で、詳細は下記のとおりである。

#### 第1回 近世史グループ研究会

2015年6月27日（土）・28日（日）東北大学災害科学国際研究所

中塚 武：プロジェクト全体および各グループ

#### 第3回 近世史グループ研究会

2016年2月13日（土）バリュー貸会議室（東京）

高槻泰郎・村 和明：近世中後期における気象データと大坂米市場—飢饉時を中心に—

郡山志保：近世における備荒貯蓄制度と気候変動—中国・東北地方を事例に—

### (2) ほかのグループとの連携

2015年度は、分類統合グループが本格的に始動し、第1回会合（2015年9月4日）には、近世史グループメンバーも参加して、プロジェクト全体に関わる



議論を展開した。また、樹木年輪解析に特化したワークショップ（2015年5月8日・9日）に参加するなど、近世史グループでの研究のみならず、他グループの活動についても関心をもち、交流する機会をもつことができた。プロジェクトも2年めを迎え、各自の研究がプロジェクト全体のなかにどのように位置づけられるのかを、考える機会が増えることはよいことであり、3年めもさらにそのような機会を増やしていきたい。

FR1から開始している古気候学グループの歴史気候学分野との連携による古日記の天気記述調査については、重点的に分析する地域を東京と京都に絞りこむことが決まり、近世史グループでは、京都の寺院の日記の調査を行なった。この調査については、2016年度も継続の予定である。

### 3. まとめと今後の展望

近世史グループでは、メンバーの各研究を個別に進めていく一方で、気候変動と社会の関係をしめす列島各地の個別事例を、「近世社会と気候変動」という枠組みで、どのようにとりまとめていくのか、という点についても議論を開始した。また、古気候学グループによる年輪酸素同位体比の解析がすすみ降水量の変動がより詳細に示されたので、近世の約260年間の中で、具体的にどの時期に気候変動が激しいのかを理解しつつ、近世史料の分析をすすめることが可能となった。近世では享保期・天保期にめりはりのきいた気候変動があったことがわかったこともあり、FR1の段階で、この変動の大きい二つの時期とその前後の時期に注目することを開始した。FR2の2015年度はさっそくその時期を論じた研究報告がなされた（第1回研究会の平野報告、第2回研究会の萩報告）。さらに、FR1で開始した、全国的な動きと気候変動の関係性を解明する研究（物価変動・農業生産力・人口変動・備蓄米と藩政）についても分析が進み、研究報告がなされた（第2回研究会の鎌谷報告、第3回研究会の高槻・村報告および郡山報告）。

さて、以上のように近世史グループでは、5年めの最終年度へ向けて、着々と個別の研究がメンバー間

で共有されつつ進められている。次年度以降は、それらの研究を積極的に発信していくことが課題といえよう。ちなみに、本プロジェクト全体の成果発信という点においては、日本史研究会4月例会で、「古気候学データとの比較による歴史分析の可能性」と題した会合をもつことができた。この企画では、中塚武プロジェクトリーダーと、中世史グループの田村憲美、そして近世史グループの鎌谷かおるが研究報告を行なった。日本史に特化した学会において、本プロジェクトの成果をまとめて発信できる機会は貴重であり、本プロジェクトの研究内容や手法、文理融合の新しい取り組みについて、日本史分野の研究者に発信していくよい機会となった。次年度もこのような取り組みを増やしていくことが必要であろう（本報告の内容は『日本史研究』646号を参照されたい）。